

2023年度日本マレーシア学会 (JAMS) 研究大会 ポスターセッション発表

日時：2024年1月21日 (日) 11:00~16:00 (コアタイム：12:00~13:00)

会場：東京大学駒場キャンパス 21 KOMCEE West MMホール

番号	発表者	所属	題目	要旨
1	林奏太	東京外国語大学言語文化学部2年	東京外大におけるウィキペディア記事を書く授業とイベント	東京外国語大学ではウィキペディア記事を執筆する授業とイベントを実施した。まず、授業では日本語(マレーシアに関する記事)とマレー語(日本に関する記事)で執筆・翻訳を行った。UKMからの交換留学生も参加し、マレー語やマレーシア事情に関して助言を行った。次に、イベントは外部団体との共催で昨年度、今年度と実施した。ベテランのウィキペディア記事執筆者の指導のもとマレーシアに関する日本語記事執筆を行った。
2	八木智哉(代表)、伊駒優衣、羽根田祐作	上智大学総合グローバル学部3年、4年	マレーシア料理におけるココナツミルクの位置づけ	今ではマレー料理をはじめマレーシア料理に欠かせないものとされているココナツミルクだが、マレーシア人にとってココナツミルクはどのような意味を持つ存在なのだろうか。ココナツミルクを使うマレーシア料理の歴史とパリエーションを文献から明らかにしたうえで、インタビューを通じてその意味付けを明らかにする。
3	伊駒優衣	上智大学総合グローバル学部4年	マレーシアの性的マイノリティに対する法制度の形成過程と見解の多様性: 1980年代前後の法制度の比較とマレーシア大学生とのインタビューを通じて	現代のマレーシアでは性的マイノリティが犯罪として扱われるような事例が国際的にも注目され、強硬な法制度がイスラームと直接的に結び付けられることが多いが、性的マイノリティを犯罪化する法は近代以降に導入され、1980年代以降に強化されてきた歴史を持つ。本論では歴史の経緯を整理した上で、現代のマレーシア人スリム大学生が政府の強硬な態度とは距離を置いた態度を示していることを明らかにする。
4	羽根田祐作	上智大学総合グローバル学部4年	マレーシアの民族枠組みとしての「インド系」を問い直す	マレーシアを紹介するときの典型的な描き方は「マレー人・華人・インド系の三民族を主要な構成員とする多民族国家」というものだが、「インド系」という民族枠組みはマレー人・華人の枠組みとは異なるのではないだろうか。本論では「インド系」に含まれる人々の多様性と「インド系」が形成されてきた歴史的過程を振り返りその特質を明らかにする。
5	丸山草太	上智大学総合グローバル学部4年	マレーシアにおける民族枠組みと学校選択: 華語小学校を選択するマレー人、インド系の事例から	マレーシアの初等教育はマレー語・華語・タミル語が選べるようになっており、特に華語学校は華人のための学校、という位置づけが基本とされてきた。しかし近年華語学校を選ぶマレー人やインド系が増加している。それはこれまでの民族枠組みの問い直しにつながるのか。本論では華語学校の位置づけの変容を歴史的に考察し、華語学校を選んだマレー人とインド系の家族へのインタビューからその選択が持つ意味を明らかにする。
6	青谷玲緒奈	上智大学総合グローバル学部4年	紛争に隠された人びとの日常: フィリピン・ミンダナオを事例にして	日本の新聞記事に「ミンダナオ」という名が現れる時、そのほとんどが紛争と平和構築と結び付いている。日本語で入手可能な研究もまた、紛争と平和構築についての研究が大多数である。本研究では、日本語で書かれたものを主な対象として紛争・平和構築以外のミンダナオの姿に焦点を当てた先行研究を概観したうえで、その他のメディアなどから見えてくるミンダナオの日常と宗教間関係を明らかにする。
7	飯田知世	慶應義塾大学総合政策学部4年	マレーシア青年期における大学選択: 海外大学分校に通う学生とは	今回は卒論のための研究成果報告を予定している。研究の主題はマレーシア国内にある私立海外大学の分校に通う生徒のパーソナルストーリーを通して、彼らが一体どのような人々なのか、どのような特徴を持っている人々なのかを調べる点である。また彼らのストーリーを知る上で重要となるジェンダーとエスニクの観点から多角的に分析していく。調査のためにマレーシア現地およびオンラインで、マレーシアの海外大学分校3校に通う12人に半構造化インタビューを行った。
8	小川佳奈実(代表)、野々部颯真、松浦めぐみ、服部由芽	立教大学観光学部4年	東海岸トレンガヌにおける水中観光	マレー半島東海岸の国立大学、トレンガヌ大学(UMT)のなかでも海洋学部と日本の観光学部生が協働し、現地の大学と観光局によるレックダイビングを中心としたダイビングツーリズムの造成に取り組み。外国人非ムスリムの立場から、活動内容や課題について報告したい。
9	浦野里彩	慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程1年	廃棄物から見る海洋観: インドネシア南スラウエシ州ラエラエ島を事例に	ラエラエ島民は海へ廃棄物を投棄することを日常化しているが、似た行為である埋め立てには反対する。以上から、廃棄物の観点から見るラエラエ島民の海洋観を明らかにしたい。フィールドワークでは4つの事象から、穢れ等を浄化し全てを受け入れる寛容さがありながらも大切にしなければ人間を狂わせ怒る存在としての海と、南スラウエシ社会の神話的世界観である中界と外界を行き来し得る存在としての廃棄物があると分析出来る。
10	イー・ジュンユンジェイソン	東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士前期課程	多民族政党へ向かって: マレーシアの民主行動党におけるマレー人の参加と代表	本報告は博士前期課程1年次の研究の中間報告である。マレーシアの連立与党のひとつである民主行動党(DAP)は「多民族政党」を標榜しているが、「華人政党」というイメージやマレー人のDAPへの抵抗感はいまだに根強い。他方、近年、同党の幹部や所属議員の間にマレー人が増えつつある。本報告では、どの程度までDAPの役員、幹部や議員の間にマレー人が進出しているのか、少数とはいえ一部のマレー人がなぜDAPを支持し、DAPに参加するのかを考察し、DAPにおけるマレー人の参加と代表の現状と課題を探りたい。
11	小野村柚佳	立教大学大学院観光学研究科博士前期	若者によるプラナカン文化継承活動	シンガポールの文化遺産の一つとして扱われるプラナカン文化について、政府による主に観光による文化政策が、ホスト側の若者には届いていない可能性がある。しかし、今後この文化遺産を保護していくに当たっては若者の担い手が必要となるので、現在の観光を通じた政府による遺産保護に加えて、どのような方策が可能または実施されるかを検討したい。
12	テ・フィシア	早稲田大学大学院アジア太平洋研究科修士2年	マレーシアにおける大学の持続可能性への取り組みに影響を与える動機と要因	大学は、教育と国際開発に関する現在の議論の最前線に立っています。SDG4だけでなく、教育、研究、支援の3つの使命を通じて、SDGsすべてに取り組む上で基本的な役割を果たしています。この調査は、マレーシアの大学の2つのケーススタディに焦点を当てています。1つは公立研究大学、もう1つは私立大学です。両者は、SDGsが採択されるずっと前から持続可能性の実践に取り組んできました。したがって、この研究は次の質問に答え、高等教育および世界の持続可能性に関する学術文献に貢献することを目的としています。 1) 選ばれた大学が持続可能性に取り組む理論的根拠と認識された成果は何ですか? 2) 大学の持続可能性への取り組みに影響を与える要因は何ですか? これは私の修士論文のための進行中の研究であり、定性的な文書分析、インタビュー、参加者観察が含まれます。
13	湯川創太郎	大阪商業大学	Covid 19終焉後のマレーシアの地域公共交通: 実地調査に基づく現況報告	筆者はCovid-19以降のマレーシアの公共交通の実情を確認するために、2023年3月・7月・8月にマレー半島にて地方部を中心としたバスの運行状況の確認を目的としたフィールド調査を行い、各地の路線バスの最新状況を把握した。過去の報告以降、国全体の政策の動向については大きな変化はないが、地域ごとの施策の変化は大きいため、今回の報告ではポスターセッションの利点を生かし、図・写真を用いて、近年の同国の地域交通政策の動向の概説を行う。
14	西芳実	京都大学東南アジア地域研究研究所	マレーシア国民文学作家アブドゥッラー・フサインの戦時体験	マレーシアの国民的文学作家アブドゥッラー・フサイン(Abdullah Hussain)は、アジア太平洋戦争からインドネシア独立戦争にかけての戦中期に、生地であるマラヤ北部地域から父の出身地であるスマトラ北部地域に拠点を移して活動した。本発表では、自伝『ある旅路』(Sebuah Perjalanan)ならびにその作品群における戦中期の記述を整理し、戦時体験が作品群にどのように反映されているのかを考察する。
15	山本博之	京都大学東南アジア地域研究研究所	第二次世界大戦後のマラヤにおける降伏日本兵の抑留: エンダウ海軍作業隊の文集『噴焔』をもとに	第二次世界大戦後、東南アジアにいた日本兵は降伏日本兵(JSP)として英国軍のちも労役に充てられた。ビルマ(ミャンマー)の降伏日本兵については『アーロン収容所』があり、イギリス人による人種差別的な言動が見られたこととともに、収容所の日本人とイギリス人、インド人、ビルマ人の間に日常的に交流があった様子が描かれているが、マラヤ(マレーシア)とシンガポールの降伏日本兵についてはあまり知られていない。ジョホール州エンダウで開墾作業に従事したエンダウ海軍作業隊が帰還前に発行した文集『噴焔』および同作業隊の野田明さんによるスケッチ画をもとに、マラヤに抑留された元日本兵の経験から南方抑留について考える。
16	篠崎香織	北九州市立大学外国語学部	マレーシアの中の華語執筆者ルー・ボーイ	ルー・ボーイエ(Lu Po Yeh/魯白野)は、少年期・青年期にマラヤ、スマトラ、ジャワを流浪し、1940年代末から1960年代初にシンガポールを拠点として作家・記者としてエッセイや小説、詩を多数著作した人物である。本名をリー・シュエミン(Lee Xue Min/李学敏)といい、ウェイ・ベイホア(Wei Bei Hua/威北華)など複数のペンネームで執筆していた。近年マレーシアおよびシンガポールでルーの著作が復刊されたり、ルーに関する研究が活発化している。本報告では、マレー語・インドネシア語文学に影響を受けながら、華語で作品を創作し、華語文芸界とマレー語文芸界を架橋しようとしたルーが、世界の中にどのように自らを位置付けようとしたのかを考察する。